

平成24年度病害虫発生予察指導情報

対象病害虫：ダイズ害虫（No.1）（カメムシ類、ハスモンヨトウほか）

平成24年8月17日

鳥取県病害虫防除所

1 情報の内容

8月17日現在、カメムシ類の発生は平年よりやや多く、ハスモンヨトウの発生は平年よりやや少ない。今後、発生に好適な気象条件が続くと予想されるため、基幹防除を徹底する。一方、ハスモンヨトウの発生はやや少ないが、8月下旬ころから白変葉が増加しはじめると予想されるため、早期発見・早期防除に努める。

また、ハダニ類の発生が多いほ場が散見されるので、各ほ場の発生状況をよく観察し、発生が多い場合は防除を行う。

2 発生状況

【カメムシ類】

- (1) 8月8～13日に行った県内巡回調査（東部3地点、中部4地点、西部3地点）の結果、発生ほ場率は63.3%（平年値：38.2%）、25株当たり平均成幼虫数は1.3頭（平年値：0.9頭）で、平年よりやや多い発生であった。
- (2) 現在、ほ場ではホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシの成虫、および若齢幼虫が発生している。

【ハスモンヨトウ】

- (1) 8月8～13日に行った県内巡回調査の結果、発生ほ場率は20.0%（平年値：40.7%）、1a当たりの平均白変か所数は0.1か所（平年値：0.3か所）で、平年よりやや少ない発生であった。
- (2) 現在、ほ場では若齢～中齢幼虫が発生している。
- (3) フェロモントラップの誘殺消長から、8月下旬頃に再び白変葉が増加し始めると予想される。

【ハダニ類】

中部～西部地区を中心に、ハダニ類の発生が多いほ場が散見されている。

3 防除上注意すべき事項

(1) カメムシ類

向こう1か月の気象予報から、本種の増殖に好適な条件が続くと予想されるため、下記を参考にして基幹防除を徹底する。なお、本種の防除は紫斑病との同時防除を原則とする。

ア 紫斑病に水和剤を使う場合

(ア) カメムシ防除にネオニコチノイド系又はフェニルピラゾール系殺虫剤を使用する場合

- ・開花期後30～35日（全体の花が終わった時期）の1回防除を基本とし、紫斑病防除薬剤（アミスター20フロアブルの2,000倍）とカメムシ防除剤（ダントツ水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、キラップフロアブル2,000倍）の混用で100ℓ/10aの薬液を散布する。

なお、展着剤を必ず加用する。

- ・カメムシ類の発生が多い場合は、前回散布の10日後に、カメムシ防除剤（水和剤あるいは粉剤）を散布する。

(イ) カメムシ防除に上記以外の殺虫剤を使用する場合は、2回防除を基本とする。

- ・ 1回目：開花期後25～30日(全体の花が終わった時期)
紫斑病防除薬剤(アミスター20フロアブルの3,000倍)とカメムシ防除剤(エルサン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤等)の混用で、150～300g/10aの薬液を散布する。
なお、展着剤を必ず加用する。
- ・ 2回目：1回目防除の10日後
カメムシ防除剤(水和剤あるいは粉剤)

イ 紫斑病に粉剤を使う場合

- ・ 1回目：開花期後25～30日後 マネージトレボン粉剤DL
- ・ 2回目：1回目防除の10日後 トレボン粉剤DL、MR.ジョーカー粉剤DL等のカメムシ防除剤

(2) ハスモンヨトウ

ア 若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努める。発生初期の場合、葉の切除などの捕殺を行うか、農薬のスポット散布を行う。

イ 防除の目安は、1a当たりの白変か所数5か所以上とする。

ウ 新葉の出葉により、白変葉が確認されにくいほ場が多いので、観察にあたっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内での観察も行う。

エ 若齢幼虫に対する登録農薬の効果は高いが、齢期が進むと防除効果が低下するため、散布適期を失しないようにする。なお、中齢～老齢幼虫が混在する場合は、ロムダン粉剤DL、ミミックジョーカー粉剤DL、ラーピンフロアブル、マトリックフロアブル、フェニックス顆粒水和剤、プレバソソフロアブル5等を散布すると、比較的効果が高い。

(3) ハダニ類

各ほ場の発生状況をよく観察し、葉の黄変が発生している場合は、農薬使用基準に従って防除を行う。